

<特集「否定、形容詞と連体修飾複文」>

イタリア語における否定、形容詞と連体修飾複文

Negation, Adjectives and Compound Sentences of Adnominal Modification in Italian

久保 博

Hiroshi Kubo

東京外国語大学非常勤講師
Part-time Lecturer, Tokyo University of Foreign Studies

要旨: 本稿は特集「否定、形容詞と連体修飾複文」(『語学研究所論集』第23号, 東京外国語大学)に寄与する。本稿の目的は33個のアンケート項目に対するイタリア語データを与えることである。

Abstract: This report aims to provide the Italian data which answers the thirty three survey questions for the special volume of the *Journal of the Institute of Language Research* 23, which focuses on the cross linguistic study of 'negation, adjectives, and compound sentences of adnominal modification'.

キーワード: イタリア語, 否定, 形容詞, 連体修飾, 複文

Keywords: Italian, negation, adjective, adnominal modification, compound sentence

特集「否定、形容詞と連体修飾複文」のアンケートについて、各文のねらいを考慮しつつ、以下に回答をまとめた。さらに簡単にではあるが解説も試みた。

アンケートへの回答は北イタリア出身のイタリア語話者をお願いした。イタリア語において興味深いと思われる事象を今回の調査から浮き上がらせるために、インタビューを二度行った。一度目は日本語を十分に理解するイタリア語話者にこのアンケートを送りその回答を得たのち、二度目に筆者がさらに他の回答も可能であるかどうかを聞くという手順をとった。

尚、グロスは最低限のみ付してある。

1. これは私の本ではない.[名詞述語文/コピュラ文の否定]

イタリア語において、コピュラ文の否定は1aのように否定辞 non がコピュラ動詞の直前¹に現れる。また、コピュラ文に限らず、一般的には、否定辞と動詞の間に人称代名詞接語形のみが現れることができる²。

a. Questo non è mio libro.
this.SG.M NEG COP.3SG POSS.SG.M book³



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

¹ 人称代名詞接辞形と否定辞がともに現れるときは、否定辞+接辞+動詞という語順になる。

² ロマンズ語における否定辞の分類については、Zanutti(1997)を参照のこと。

³ 本アンケートに掲載されているイタリア語の文では、動詞が直説法である場合、その旨は取り立てて明記されていない。接続法である場合は、その旨がグロスに示されている。

2. この部屋には椅子がない.[存在文の否定]

イタリア語には,存在を表すために様々な表現があるが,ここでは最も標準的な動詞 *esserci* 「ある」を用いた文を 2a に示す.また日本語の文を「中立叙述」と解釈する.

- a. In questa stanza non ci sono sedie.
in.PREP this.SG.F room NEG there_are.3PL chairs

ここで強調しておくべきことは,形態論上,可算名詞である「椅子」は複数形であり,それに伴い動詞も複数形に活用する点である.

3. この部屋には一つも椅子がない.[全部否定・モノ]

モノに関する存在文の全部否定の場合,標準的に単数形で否定形容詞の *nessuno* 「誰(何)も...ない」が用いられる.もしくは,否定副詞 *neanche* 「も...ない」もしくは *nemmeno* 「すら...ない」を不定冠詞および存在しないモノの単数形とともに用いる.*nessuno* や *neanche* が動詞に後置される場合,二重否定が起こる.つまり否定辞 *non* は義務的に表れる.

- a. In questa stanza non c'è nessuna sedia.
in.PREP this.SG.F room NEG there_is.3SG nobody.ADJ.SG.F chair
- b. In questa stanza non c'è neanche una sedia.
in.PREP this.SG.F room NEG there_is.3SG neither.ADV a.SG.F chair

3a,3b ともに全部否定であることは確かであるが,前者の場合細かな含みの違いがある.前者は「椅子の数量がゼロである」と直接明示しているのに対し,後者は「椅子の数量が最も少ない数である 1 に達していない(つまりゼロである)」と間接的に示している.

4. その部屋には誰もいない.[全部否定・ヒト]

ヒトに関する存在文の全部否定の場合も,単数形で否定形容詞 *nessuno* 「誰(何)も...ない」を,「ヒト」を表す語(例えば *uomo* 「人間,男」とともに用いることができる(4a)が,より一般的には *nessuno* を否定代名詞として用いる(4b).後者の場合は「ヒト」のみに用いることが可能で,「モノ」に用いることはできない.

3 の場合同様,*nessuno* や *neanche* が動詞に後置されるので,否定辞 *non* は義務的に表れる.

- a. In quella stanza non c'è nessuno.
in.PREP that.SG.F room NEG COP.3SG nobody.PRN
- b. In quella stanza non c'è nessun uomo.
in.prep that.SG.F room NEG COP.3SG nobody.ADJ.SG.M human

また,以下のように「ヒト」にのみ使える最小化詞 (minimizer)⁴を用いた回答も得た.

- c. In quella stanza non c'è un cane.
in.prep that.sg.f room neg cop.3sg a.M dog
- d. In quella stanza non c'è un' anima viva.
in.prep that.SG.F room neg cop.3SG a.F soul living.ADJ

5. その本はこの部屋にない.[所在文の否定]

所在文は,通常,主語+essere 動詞(コピュラ) +場所という構文を取り,それを否定する場合,コピュラ動詞である essere に否定辞が前置される (5a) .

- a. Quel libro non è in questa stanza.
that.SG.M book NEG COP.3SG in.PREP this.SG.F room.SG.F

6. この犬は大きくない.[形容詞文の否定]

形容詞文の否定では,コピュラ動詞に否定辞 non が前置される (6a) .

- a. Questo cane non è grande.
this.SG.Mdog NEG COP.3SG big.ADJ.SG.M

7. この犬はあまり大きくない.[形容詞文の部分否定]

形容詞分の部分否定では,molto「とても」やcosìといった程度を表す副詞を伴った文で動詞に否定辞が前置される.ここでは molto を用いた文を示す (7a) .

- a. Questo cane non è molto grande.
this.SG.Mdog NEG COP.3SG very.ADV big.ADJ.SG.M

8. eこの犬はあの犬より大きい.[比較級]

伝統的なイタリア語文法では,比較級に関して優等比較級,劣等比較級,同等比較級の三種の文法事項がある.前者二つは,修飾する二つも物体や概念などの差異を表すのに対し,同等比較級は二つの物体や概念

⁴ 4aの文との対比を鮮明にするために「この部屋には何も無い」という文の場合についても調査を行い次のような回答を得た. 以下のa, bでは, 否定代名詞nienteおよびnullaが, cでは否定形容詞nessunoが用いられている. dでは標準イタリア語ではないが, 「モノ」にのみをしめす最小化詞(minimizer)が用いられる.

- a. In questa stanza non c'è niente.
b. In questa stanza non c'è nulla.
c. In questa stanza non c'è nessuna cosa.
d. In questa stanza non c'è un cazzo.

さらに, nienteが名詞に前置され形容詞として「モノ」の全部否定に使われるケースもあるが, 標準イタリア語においても「特別」な事例であるため, その詳細に関してはGarzonio / Poletto (2008)およびMoscati(2006)を参照されたし.

最小化詞の定義, その通域的なヴァリエーションについて, さらにロマンス語において最小化詞がフランス語の動詞に後置される否定辞pasのように文法化する通時的プロセスについてはGarzonio / Poletto (2008)およびそこに掲載されている参考文献を参照のこと.

また, 否定代名詞や否定形容詞が動詞に前置される場合, 否定辞 non があらわれず二重否定にならないが, それについての解説は省略する.

などの類似点を表す。

優等比較級では,più+形容詞+di+比較される対象,劣等比較級では meno+形容詞+di+比較される対象,という構文をとる。

文 8 は,優等比較級を用いるのが一般的だが (8a) ,劣等比較級を用いても似たような意味の文を作ることができる (8b) .

a.	Questo	cane	è	più	grande
	this.SG.M	dog	COP.3SG	more.ADB.	big.ADJ.SG.M
	di	quell'		altro.	
	than.PRE	that.SG.M		other.PRN.SG.M	
b.	Questo	cane	è	meno	piccolo
	this.SG.M	dog	COP.3SG	less.ADV	small.ADJ.SG.M
	di	quel		cane.	
	than.PRE	that.SG.M		dog	

9. この犬がその犬たちの中で一番大きい.[最上級]

伝統的なイタリア語文法では,比較最上級と絶対最上級の区別があり,前者はある一定の範囲内で「最も...である」という意味を客観的に表すのに対し,後者は主観的に「とても...である」「非常に...である」といった意味をあらわす。

文 9 は,前者の比較最上級にあてはまり,比較級同様,優等最上級 (9a) と劣等最上級 (9b) の区別がある.前者は,定冠詞+più+形容詞+di+比較される範囲,後者では,定冠詞+meno+形容詞+di+比較される範囲,という構文をとる。

a.	Questo	cane	è	il	più	grande
	this.SG.M	dog	COP.3SG	the.SG.M	more.ADB	big.ADJ.SG.M
	di	quei		cani.		
	than.PRE	that.PL.M		DOG.PL		
b.	Questo	cane	è	il	meno	piccolo
	this.SG.M	dog	COP.3SG	the.SG	less.ADV	small.ADJ.SG.M
	di	quei		cani.		
	than.PRE	that.PL.M		DOG.PL		

10. 今日はあの人は来ない.[自動詞文の否定]

10a のように,コピュラ動詞と同様,否定辞 non を動詞に前置する。

a.	Oggi	lui	non	viene.
	today.ADV	he	NEG	come.S.3SG

11. あの人はその本を持って行かなかった.[他動詞文の否定]

自動詞,他動詞にかかわらず文を否定するときには通常 non が動詞に前置される (11a) .

a.	Lui	non ha	portato	via
	he	NEG have.AUX.3SG	bring.PAST.PTCP	away.ADV
	il	libro.		
	the.SG.M	book		

12. 全ての学生が参加しなかった/学生は全員参加しなかった.[数量の全部否定]

イタリア語では「すべての…」を表すのに,tutto/i + 定冠詞 + 名詞句が用いられることから,文 12 の回答として 12a のような文を予測していたが,有標だという事であり,アンケートの答えとしては,12b のような回答を得た.

a.	Tutti	gli	studenti non	hanno	partecipato.
	all.ADJ.PL.M	the.PL.M	students NEG	have.AUX.3PL	participate.PAST.PTCT
b.	Gli studenti	non	hanno	partecipato	tutti.
	the students	NEG	have.AUX.3PL	participate.PAST.PTCT	all.ADJ.PL.M

13. 全ての学生が参加したわけではない.[数量の部分否定]

数量の部分否定では,否定辞 non が数量を表す形容詞に前置される.本回答では,tutti が non によって修飾される (13a) ⁵.

a.	Non	tutti	gli	studenti	non	hanno
	NEG	all.ADJ.PL.M	the.PL.M	students	NEG	have.AUX.3PL
						partecipato.
						participate.PAST.PTCT

14. (私は買わなかった.しかし,決して)値段が高いというわけではない.[文の否定]

14a のように,否定される文が従属節として補語標識により導入され,主節は否定辞とコピュラ動詞のみで構成される.

a.	Non	è	che	era	caro.
	NEG	COP.3SG	COMP	COP.IPFV.3SG	expensive.ADJ

日本語の場合同様,ただ従属節の命題を単純に否定しているのではなく,別の作用を持っている⁶.

さらに,標準イタリア語ではないが,聞き手の「前提」を否定するととらえた場合,14b のように,しばしば mica という動詞に後置される否定の副詞が使われる⁷.

⁵ ほかにも 14 の二つの構文を使って同じような意味を表すこともできるが,ただこの二つの場合,聞き手の前提などを否定しているものであり,ここでの質問の意図である「部分否定」とは多少なりとも違うように思われる.

⁶ より詳しい解説は Garzonio / Poletto (2015)を参照のこと.

⁷ mica の詳細については,Cinque (1976)および Penello-Pescarini(2008)を参照のこと.

- b. Non era mica caro.
 NEG COP.3SG COP.IPFV.3SG NEG expensive.ADJ

15. 走るな！[禁止]

イタリア語では、禁止を表すために数種類の回答を得た。

最も一般的と考えられるものは、否定命令法である。伝統的なイタリア語文法における否定命令法は、二人称単数の場合、否定辞 non + 動詞の不定法(15a)、敬称（三人称単数）の場合、否定辞 non+命令法三人称単数が用いられる(15b)。形態論上、後者は接続法現在と一致する。

- a. Non correre!
 NEG run.INF
- b. Non corra!
 NEG run.S.IMP.3SG

そのほかにも、以下のような構文をもちいても否定を表すことができる。

非人称の si を用い、一般的にある行動をしないことを表し、言語外の含みとして禁止を表す(15c)。この構文は、頻繁に子供をしつけるために用いられる。

- c. Qui non si corre.
 here.ADV NEG CLT run.S.3SG.

義務や可能性を表すモダリティー動詞を否定辞 non と共に用いる（15d,15e）。

- d. Non devi correre.
 NEG must.MOD.2SG run.INF
- e. Non puoi correre
 NEG can.MOD.2SG run.INF

16. 大きな声を出すな！[他動詞文の禁止]

イタリア語で、大きい声を出すに最も近い表現では、自動詞が用いられたため、「大声でその言葉を言うな」という文を基本に考える。自動詞の時と同じく二人称単数の場合、否定辞 non+動詞の不定法（16a）、敬称（三人称単数）の場合、否定辞 non+命令法三人称単数が用いられる。

- a. Non dire la parola ad altra voce.
 NEG say.3SG THE.SG.F word aloud.ADV

15 の自動詞を用いた文と大差はなく、そのほかの同じ表現を用いて禁止を表すことができる。唯一の違いは、「義務」「必要性」をあらわす andare「行く」+過去分詞の受け身構文であり、これは自動詞に用いることはできない。これに否定辞 non をつけることで、「禁止」を表すことができる（16b）。

b.	La	parola	non	va	detta	ad alta voce.
	THE.SG.F	WORD	NEG	go.AUX.3SG	say.PAST.PTCT	aloud.ADV

17. 明日は雨は降らないだろう.[推量の否定]

推量は様々な方法で表すことができるが,17a のように forse 「おそらく,たぶん」などのモダリティの副詞を用いるのがもっとも簡易かつ基本的な表現であろう。また,17b のように,credere 「思う,考える」, pensare 「考える」等の認識に関するモダリティ動詞,もしくは 17c のように蓋然性や可能性を表す probabile, possibile などの形容詞を主節に用いて,推量を表すこともできる。以下のように,推量される内容が従属節で示される場合,動詞は接続形をとる。

または,può darsi, può essere などの可能性を表す成句を用い (17d) ,推量を表すことができる。

a.	Forse	domani	non	piove		
	maybe.ADV	tommorrow.ADV	NEG	rain.3SG		
b.	Penso	che	domani	non	piova.	
	think.1SG	COMP	tommorrow.adv	NEG	rain.SBJV.3SG	
c.	È	probabile	che	domani	non	piova.
	be.AUX.3SG	probable.ADJ	COMP	tommorrow.adv	NEG	rain.SBJV.3SG
d.	può	darsi	che	domani	non	piove.
	can.MOD.3SG	give.REFL.INF	COMP	tommorrow.adv	NEG	rain.SBJV.3SG

18. あの人に聞こえないように,小さな声で話してくれ.[目的節の否定]

目的節は,前置詞 per,もしくは perché, affinché, acciocché, ché, onde 等の接続詞によって導入される。前者の場合,動詞は不定詞が,後者の場合,否定文であるかにかかわらず接続法が用いられる。ここでは perché を用いた文を示す (18a)が,興味深いことに,perché を直説法の動詞と用いると,目的ではなく理由を表す (18b) 。

a.	Parla	piano	per favore,	perché
	speak.IMP.2SG	quietly.ADV	please	so_that.CONJN
	quella	persona non	lo	senta
	that.SG.F	person NEG	it.CLT.SG.M	hear.SBJV.3SG
b.	Parla	d alta voce	per favore,	perché
	speak.IMP.2SG	aloud.ADV	please	because.CONJN
	quella	persona lo	sente.	
	that.SG.F	person it.CLT.SG.M	hear.3SG	

19. 私はあなたを怒らせようと思ってそう言ったんじゃない.[否定のスコープの調節]

否定のスコープの調節に関しては,19a,19b の二種類の回答を得た。前者の目的節は否直前に否定辞が置かれ,統語的に否定のスコープが調節されていることが明示される。後者の場合,否定辞は無標の位置にあるが,目的節全体が強いアクセント (大文字で強調) を伴って発音される。つまり,ここでは統語的には否

定のスコープの調節が明示されない。

- a. Te l' ho detto non
 you.CLT.SG it.CLT.SG have.MOD.1SG say.PAST.PTCT NEG
 per farti arrabbiare.
 for.PRE CAUS.INF-you.REFL.CLT.SG get_angry.INF
- b. Non te l' ho detto
 NEG you.CLT.SG it.CLT.SG have.AUX.1SG say.PAST.PTCT
 PER FARTI ARRABBIARE.
 for.PRE CAUS.INF-you.REFL.CLT.SG get_angry.INF

20. 私が昨日買った本はどこ(にある)? [内の関係の連体修飾節・目的語]

イタリア語では内の関係の連体修飾節・目的語は,che や il quale などのいわゆる関係代名詞によって導入される従属節によってあらわされる.本アンケートではは che を用いた回答を得た (20a) .

- a. Dov' è il libro che ho
 where COP.3SG the.SG.M book COMP have.AUX.1SG
 comprato ieri.
 buy.PAST.PTCP yesterday

21. その本を持って来た人は誰(か)? [内の関係の連体修飾節・主語]

内の関係の連体修飾節・主語も,目的語同様,che や il quale などのいわゆる関係代名詞が導入する関係節によって表される.

- a. Chi è la persona che ha
 who COP.3SG the.SG.F person COMP have.AUX.3SG
 portato quel libro?
 bring.PAST.PTCP that.SG.M book

22. この部屋が私たちの仕事をしている部屋です.[内の関係の連体修飾節・場所]

内の関係の連体修飾節・場所は,関係副詞 dove,前置詞+cui (関係代名詞) , 前置詞+定冠詞+ quale (関係代名詞) が導入する従属節によってあらわすことができる.ここでは dove を用いた回答を得た (22a) .

- a. Questa è la stanza dove lavoriamo.
 this.SG.F COP.3SG the.SG.F room where work.1PL

23. 足が一本折れたあの椅子はもう捨ててしまった.[内の関係の連体修飾節・所有者]

内の関係の連体修飾節・所有者を表すために,23a,23b の二種類の回答を得た⁸.

- a. Ho già buttato via
have.AUX.IMFV.1SG already.ADV throw.PAST.PTCT away.ADV
la sedia che aveva una gamba rotta.
the.SG.F chair COMP have.IMFV.1SG a.F leg break.PAST.PTCT
- b. Ho già buttato via
have.AUX.IMFV.1SG already.ADV throw.PAST.PTCT away.ADV
la sedia della quale una gamba era rotta.
the.SG.F chair of_the_which a.F leg be.COP.3SG break.PAST.PTCT

前者は,補文標識 *che* で導入される従属節によって所有者が示され,後者では所有を表す前置詞 *di* を伴った関係代名詞 *il quale*⁹によって導入される従属節によって所有者が示される.

24. ドアを叩いている音が聞こえる.[外の関係の連体修飾節]

この文には知覚動詞を使うのが最も一般的だと思われるが,あえて *rumore* 「音」という語を使ってもらった場合,24a のような回答を得た¹⁰.

- a. Sento il rumore di qualcuno che
hear.1SG the.SG.M sound of.PRE someone COMP
sta bussando la porta.
stay.AUX.3SG knock.GER the.SG.F door

25. あの人が結婚したという噂は本当(か)? [外の関係の連体修飾節]

voce 「噂」という語の場合は外の関係の連体修飾節を伴うことができ,主に *che* によって従属節を導入する (25a) .

- a. È vera la voce che quella persona
COP.3ST true.ADJ the.SG.F rumor COMP that.SG.F person
si sia sposata?
CLT.REFL be.SBJV.3SG get_marry.PAST.PTCT

26. 私はその人が来た時にご飯を食べていた.[時間節]

時間節は,quando 「...の時」 (26a) や *mentre* 「...の間」 (26b) などの接続詞,もしくは時間を表す先行詞とともに用いられる前置詞を伴った関係代名詞 *cui* 等 (26c) によって導入される.

⁸ この二つの回答以上に一般的なものは,“Ho già buttato via la sedia con una gamba rotta”のように *con* 「...とともに」によって導入される前置詞句を用いることだが,ここでは出題の意図にそぐわないため脚注に記す.

⁹ 回答では,先行詞 *sedia* の数と性が一致した *la quale* が用いられている.また 23b はあまり一般的な構文ではない.

¹⁰ 直訳すると,「ドアをノックしている誰かの音が聞こえる」となる.

- a. Quando stavo mangiando, lui è entrato.
 when.CONJN stay.IMPF.1SG eat.GER he be.AUX.3SG enter.PAST.PTCT
- b. Mentre stavo mangiando, lui è entrato.
 while.CONJN stay.IMPF.1SG eat.GER he be.AUX.3SG enter.PAST.PTCT
- c. Nel momento in cui stavo mangiando, lui è
 in_the moment in_which stay.IMPF.1SG eat.GER he be.AUX.3SG
 entrato.
 enter.PAST.PTCT

27. 私はその人が待っている所に行った.[場所節]

場所節を示すために,関係副詞 *dove* や *al posto in cui / dove* などの場所を表す語を先行詞としてとる関係副詞を用いることができるが,本アンケートでは 27a を回答として得た.

- a. Sono andato dove mi stava.
 be.AUX.1SG go.PAST.PTCT where me.CLT.1SG stay.AUX.3SG
 aspettando.
 wait.GER

28. 私はその人が走っていったのを見た.[補文節・視覚]

知覚動詞は,視覚 28,聴覚 29 とともに,a, b 二つの構文で表すことができる.28a は,知覚動詞+不定動詞という構文をとり,知覚動詞の直接目的語で表されている語が,不定動詞の意味上の主語となる.この不定詞節の代わりに,28b のように活用した動詞を含む従属節を用いることもできる.

- a. Ho visto quella persona correre.
 have.AUX.1SG see.PAST.PTCT that.SG.F person run.INF
- b. Ho visto quella persona che correva
 have.AUX.1SG see.PAST.PTCT that.SG.F person COMP run.IMPF.3SG

28b の文は一見普通の関係詞節が有るように見えるが,いくつかの関係代名詞とは違う性格を持つことから *pseudorelativa* (疑似関係詞節) などと呼ばれている.(Salvi / Vanelli 1994).

情報提供者によるとこの二つの構文の意味上の違いは以下のとおりである.一方で,28a では走り始めてから止まる,もしくは消え去るまでのすべてを目撃したのに対し,29b ではすでに走っているところを目撃したという違いがあるという.

29. 昨日の夜,私は彼らがしゃべっているのを聞いた. [補文節・聴覚]

- a. Ieri notte li ho sentiti
 yesterday night them.CLT.SG.M have.AUX.1SG hear.PAST.PTC
 parlare.
 talk.INF

- b. Ieri notte li ho sentiti
 yesterday night them.CLT.SG.M have.AUX.1SG hear.PAST.PTC
 che parlavano.
 COMP talk.IMPF.3PL

30. 私はその人が昨日ここに来たことを知っている.[補文節・知識]

知識を表す動詞に関しては,知覚動詞と同様の構文をとることはできない。「知っている」内容は補文標識 *che* によって導入される従属節として示される (30a) .

- a. So che ieri lui è stato qui.
 know.1SG COMP yesterday he be.AUX.3SG be.PAST.PTCT here.ADV

31. (昨日)彼は彼が今日ここに来たと言った./ (昨日)彼は、「私は今日ここに来た」と言った.[補文節・直接発話/間接話法]

間接話法の場合,前置詞 *di* + 不定詞 (31a) ,もしくは補文標識 *che* (31b) によって従属節を導入する.前者は主文と従属節の動詞の主語が一致している場合につかい,それ以外の場合は後者が用いられる.

直説話法の場合には,日本語の「と」やサンスクリット語の *iti* のような引用節を示すマーカーは存在しない (31c) .

- a. Lui ha detto di essere
 he have.AUX.3SG say.PAST.PTCT of.PRE be.AUX.INF.
 venuto oggi.
 come.PAST.PTCT today.ADV
- b. Lui ha detto che è
 he have.AUX.3SG say.PAST.PTCT COMP be.AUX.3SG
 venuto oggi.
 come.PAST.PTCT today.ADV
- c. Lui ha detto: “Sono venuto
 he have.AUX.3SG say.PAST.PTCT be.AUX.1SG come.PAST.PTCT
 qui oggi”.
 here.adv today.ADV

32. 私はリンゴが(あの)皿の上にあったのを食べた.[内在節・従主・主主]

イタリア語では,内在節は存在しない構文であり,32 の場合「リンゴ」は主節の直接目的語として明示される (32a) .

- a. Ho mangiato la mela che stava
 have.AUX.1SG eat.PAST.PTCT the.SG.F apple COMP stay.IPFV.3SG

su	quel	tavolo
on.PRE	that.SG.M	table.

33. 私はネコが家に入ってきたのを捕まえた。[内在節・従主・主目]

32 の場合と同じく,ネコは主節の直接目的語として明示される (33a) .

a.	Ho	afferrato	il	gatto				
	have.AUX.1SG	grab.PAST.PTCT	the.SG.M	cat				
	nel momento in cui		stava	per	entrare	in	casa	
	in_the_moment_in_which		stay.IPFV f	or.PRE	enter.INF	in.PRE	home	

参考文献

- Cinque, G. 1976. Mica. *Annali della Facoltà di Lettere e Filosofia dell'Università di Padova*, 1: 101-112.
- Garzonio, J. / Poletto, C. 2008. Minimizer and quantifiers: a window on the development of negative markers. *Studies in Linguistics CISCL Working Papers*, 2: 59-80.
- Garzonio, J / Poletto, C. 2015. On Preverbal Negation in Sicilian and Syntactic Parasitism. *Isogloss*, Special Issue: 133-149.
- Moscato, V. 2006. *The Scope of Negation*. PhD: Thesis, University of Siena.
- Salvi, G.P. / Vanelli, L. 2004. *La nuova grammatica*. Bologna: Il Mulino.
- Penello, N. / Pescarini, D. 2008. Osservazioni su mica in italiano e alcuni dialetti veneti. *Quaderni di lavoro dell'ASIt*, 8: 43-56.
- Zanuttini, R. 1997. *Negation and Clausal Structure*. New York & Oxford: Oxford University Press.

執筆者連絡先:hiroshi80@tufs.ac.jp

原稿受理:2019年5月7日